

圖版要項

一 黒田清輝筆 洋燈と二兒童（原色版） 東京 某氏藏

麻布油彩 額装 縦 九八・五糎（三尺二寸五分）
横 七九・二糎（二尺六寸一分）

二 同 グレーの春 某氏藏

麻布油彩 額装 縦 三三・〇糎（一尺九分）
横 二二・〇糎（七寸二分六厘）

三 同 「富士六景」の中二景 東京 三井コレクション

麻布油彩 額装 各縦 三三・〇糎（一尺九分）
横 二五・〇糎（八寸二分五厘）

四 a 同 舞妓（昔語り圖習作） 東京藝術大學藏

板繪 油彩 額装 縦 三一・八糎（一尺五分）
横 二三・五糎（七寸七分五厘）

b 同 パリ風景 東京國立文化財研究所藏

麻布油彩 額装 縦 四〇・七糎（一尺三寸四分）
横 二七・三糎（九寸）

——以上——四 隈元謙次郎「黒田清輝作品補遺上」参照——

圖版要項

五 西域出土塑造頭部 京城 韓國國立博物館藏

a 高さ二二・五糎（六寸八分）
b 高さ二一糎（六寸七分）

この二點の塑造頭部は、ともに舊朝鮮總督府博物館に藏せられた、大谷ミツシヨンの將來品である。

a 像を庫車將來、b 像を和闐將來と傳へるが、ほぼ同大である點、大膽な筆によるメイク・アップの調子などの共通性を認められることは、おそらく同一出土地を豫想せしめる。云ふまでもなく、東トルキスの美術の大かたの様式概念よりすれば、コオタンでもクチャでもなく、中國系統に近いトゥルファン地域に擬すべきを常識とする。

鎧甲を着したa 像はアスタアナはじめトゥルファン地域の古墳から副葬品として發見された武人俑と共通する武裝である。おなじく舊朝鮮總督府博物館藏

挿圖 1.

の大谷コレクションに後者の例(挿圖第一)を見出されるが、この明かに古墳出土品と知られ、泥俑と呼ばれるべきものは、この例にあつて高さ約三〇糎で、他の多くの例もまた同様の大きさを出でない。この大きさの關係から見て、遙に大きく實人の三分の二に値すべき原初の像を想定するとき、これらの塑造頭部を前述の例と比較して、トゥルファン周邊出土としても古墳埋葬品かは、判定に躊躇されるものである。

a 像の深いモウルディングによる瞋目の表情は、前述の小武人俑の簡單で型通りの制作と區別されるものがある。より彫塑的であり、しかもメイキ・アッブにおいても、より繪畫的效果を擧げてゐる。この強い表現、それに必然結付く自由な、そして力強い手法から類例の例を求むるならば、ルコックの Chotscho Taf. 55—o に紹介された塑造頭部(挿圖第二)がある。

魔神頭部。顔色は淡褐、髪、眉、形式化の目立つ髭(?)は赤煉瓦色、その髭(?)は唇の臙脂色で縁取られる。眼窩は臙脂色、眼球は青をふくむ白朱で隈取り、瞳は黒、出土地は勝金口の第二、第三号窟寺址間、左岸の急な崖上の寺址發見。高さ二〇糎、横一七糎五。と説明されるものである。

挿圖 2.

b 像と比較すべき古墳出土品の例も、おなじく舊朝鮮總督府博物館藏の大谷コレクションに見出される。これらの泥俑はその服飾から明かに文官像であるが、b 像にこれらと異

つて、冠を着けず、防寒の被物とも推せられる着装である。文官像が高さ二八糎五で他の数多い例と同大であることは、大きさの關係もまた b 像に對し、a 像の場合と同じである。b 像のモウルディングの自由さ、十分な量感、確かに a 像の場合とおなじくよく彫塑的なものを會得した技術である。

a・b 兩像とも白、朱、墨を主色とする中國風の着色であり、大膽な粗い筆致で、むしろ表情に生彩を與へる。この意味でも中國に近いトゥルファン地域の所産とすべき理由はあらう。そして古墳副葬品とすべき、大きさに難點があり、ルコックの例に倣つて寺院址の出土と考へるのが妥當である。佛教關係の造像とすれば、もとより端役としての位置にある造形ではあるが、頼れ去つて必しも多くの遺品を見

挿圖 3.

ない同地の彫塑としては、むしろ貴重な存在たることを否めない。数多い泥俑との關係も、これが典型として役立ち、その簡易化において彼らの造形があつたとも考へられよう。(熊谷宣夫)